

高病原性鳥インフルエンザ発生時の評価係の業務効率化への取組（第2報）

香川県西部家畜保健衛生所西讃支所
○森西恵子 松元良祐

はじめに

令和2年、本県では13農場で高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)が発生し、19農場に対して防疫措置を実施した。防疫措置完了前に間隔を置かず次の農場が発生しているような状況であり、評価係に限らず現場の家畜防疫員が全体的に極めて不足し、未経験者が評価係を担当することもあった。結果、汚染物品などの数量計測に手間取ったため防疫措置完了が遅延したり、手当金交付対象物の記録が散逸したため評価額算出が令和2年度を超えて遅延したりした。そこで、評価係の業務効率化のため、評価係の業務内容に特化した作業マニュアルを作成した。また、評価額算出作業の効率化については、令和2年事例の計算書の様式や算出方法を再利用することを提案した(第1報より)。

令和4年、本県で再びHPAI発生があり疫学関連農場を含む7農場で防疫措置を実施した。この際、第1報で作成した評価係マニュアルを実際に用いて対応し、その有効性を振り返り検証したので報告する。

作成した評価係マニュアルの有効性を検証

以下の①～⑥の6項目について検証した。

① 出動時の携行品リスト

検証ポイント：実際の発生時の出動対応改善につながったか

リストを作成したことで必要な道具を発生前に事前準備することが可能となり、実際の出動時は迅速に現地へ持って行くことができた。また、令和4年も発生間隔が短いことがあり、担当者が不在で事前準備ができなかった時も担当外の人間がリストを見て準備することができた。(図1)

② 農場主への聞き取り事項リスト

検証ポイント：発生の初動時点で評価作業の内容が把握できたか

農場主への聞き取りを評価係マニュアルで作成した聞き取りリストを確認しながら行うことで、評価の作業内容を把握し、確認漏れはなかった。(図2)

③ と殺対象の撮影リストと見本

検証ポイント：作成した撮影リストと撮影見本で

作成した評価係マニュアルの有効性を検証

マニュアルの各項目	検証ポイント
① 出動時の携行品リスト	発生時の出動対応の改善

一式を事前準備可能
→ 出動時迅速に現地へ

事前準備なし、担当不在
→ 担当外でも準備可能

図1 ①出動時の携行品リスト

作成した評価係マニュアルの有効性を検証

マニュアルの各項目	検証ポイント
② 農場主への聞き取り事項リスト	初動時点で作業内容把握

作業予定把握、確認漏れなし

図2 ②農場主への聞き取り事項リスト

と殺対象の記録漏れを回避することができたか。

初動時に撮影リストや見本を実際に現場へ持ち込み、リストや見本を確認しチェックしながら、と殺対象鶏の撮影を行うことができ、記録についての漏れはなかった。(図3)

④改良した処分数量の計測方法

検証ポイント：労力削減と作業時間短縮

令和2年は多数の動員者と一緒に、飼料をタンクからフレコンに詰めて量を計測しており、防疫措置作業の遅延の一因となっていた。令和4年は、マニュアルに記載した方法、つまり、タンクのスリットからの目視とゴムハンマーの打音でタンク内の量を計測する方法で実施したところ、作業は評価係2人ででき、タンクからの汚染飼料を回収する前に計測を終わらせることができた。(図4)

また、農場内の汚染卵についても、令和2年はこれも多数の動員者と一緒に、回収しながら量を計測していたが、令和4年は、マニュアルに記載した方法、つまり、農場内で使える設備(集卵システムや計量設備)を使用する方法で実施したところ、作業としては機械のデータを確認するだけで済み、こちらも回収前に計測を終わらせることができた。

⑤改良した処分数量の記録様式

検証ポイント：記録と集計の簡易化につながったか

動員者に改良した記録様式を用いて殺処分羽数等の記録及び集計を実施してもらったところ、防疫措置終了後、記録や集計に抜けはなく、記録用紙を動員者からスムーズに評価係へ回収することもでき、直ちに評価額計算作業に取りかかることができた。

⑥過去の評価額計算書を再利用

検証ポイント：計算書作成の効率がアップしたか

令和2年時に作成した評価額計算書を再利用した結果、作業が速やかに進み、令和4年度内にすべての農場の計算書をほぼ完成することができた。

また、令和4年度発生2例目及び3例目は、発生日が11月22日及び11月23日と連続発生であり、それぞれが疫学関連農場を1農場及び2農場持つ状況だった。この時は複数農場に対して同時進行で防疫措置を実施した。このような場合は、各農場へ作業内容を指示したり、作業の進捗状況を確認したりすることが困難であるが、評価業務は作成したマニュアルにより円滑に遂行することができた。当管内は疫学関連農場を持つ農場の割合が高い(110農場中50農場(45.5%))が、そのような状況でも本マニュアルは有効であると考えられる。

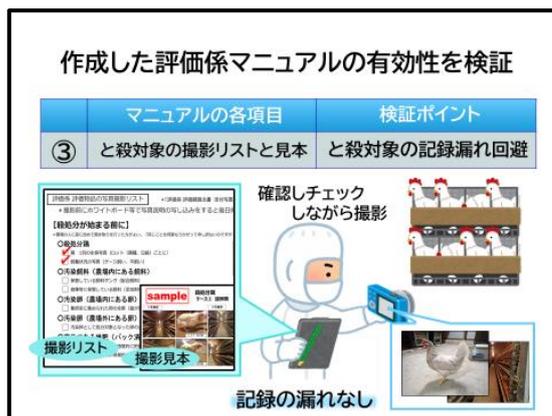


図3 ③と殺対象の撮影リストと見本



図4 ④処分数量の計測方法

まとめ

令和2年のHPAI発生を受けて作成した評価係マニュアルを用いて、令和4年のHPAI発生に対応し、その有効性を検証した。出動時の携行品リストを用いることで、事前に準備することができ、迅速な出動ができた。農場主への聞き取り事項リストを用いることで、発生の初動の時点で評価業務の内容を把握することができた。と殺対象の撮影リストと見本を用いることで、と殺対象の記録写真を忘れずに撮影することができた。マニュアル内で提案した、改良した処分数量の計測方法を用いることで、汚染物品の回収前に評価係のみで計測が終了でき、計測に対する労力削減や作業時間の短縮につながった。改良した処分数量の記録様式を用いることで、処分数量の集計記録に抜けはなくスムーズに回収することができた。過去の評価額計算書を再利用することで、算出作業の効率が上がり、令和4年度内に計算書がほぼ完成できた。このように、作成した評価係マニュアルを用いることで、令和4年度の防疫措置の業務を円滑に遂行することができた。

令和5年は、実際の対応状況を振り返ってマニュアルの改正を行ったり、評価係の業務経験の共有を目的として、評価係担当者を対象にした研修会を実施したりした。今後も、評価係の業務効率化のため、同様に継続実施していくことが必要と考える。

参考

・森西ら「高病原性鳥インフルエンザ発生時の評価係の業務効率化への取組(第1報)」 令和3年度香川県家畜保健衛生業績発表会より